

東京言語研究所

集中講義のご案内

東京言語研究所では、言語学を研究されている方や言語学に興味をお持ちの方を対象〔理論言語学講座〕をはじめとして様々な講座を開講しております。〈集中講義〉は、多様な研究の一領域を集中的に学べる講座です。ぜひご参加ください。

〈演題〉 不定語の統語メカニズム：分解と認可

〈講師〉 平岩 健 氏（明治学院大学教授）

〈日時〉 2021年 3月27日(土) 10:30~16:15 (90分講義×3コマ)
28日(日) 10:30~16:15 (90分講義×3コマ)

〈講義形式〉 ZOOMによるオンライン講義

※コロナウィルス感染症の状況が改善されればオンラインに加え、当研究所の教室での受講も検討します。(申込開始 2/19 に HP にてお知らせします)

〈参加費〉 一般 12,000 円

2020 年度理論言語学講座受講生 9,000 円

〈申込み〉 ホームページ「申込みフォーム」からお申込ください。

※ 申込み受付は 2 月 19 日(金)~3 月 23 日(火)

講師紹介：2005 年マサチューセッツ工科大学大学院言語学・哲学科博士課程修了、Ph.D.(言語学)。ニューヨーク大学言語学科客員研究員、ヴィクトリア大学言語学科助教授を経て、明治学院大学文学部英文学科教授。専門は理論言語学、統語論、消滅危機言語のフィールドワークに基づく記述的・理論的研究。研究主要業績に、Hiraiwa, K. & Y. Kobayashi. (2020). Countersluicing. *Syntax* 23(3): 295-312、Hiraiwa, K. (2018). Something visible in Japanese. *Glossa* 3(1), 132.、Hiraiwa, K. (2017). Internally headed relative clause. In *The Wiley Blackwell Companion to Syntax*, 2nd Edition. 2038-2069. Hiraiwa, K., G. Akanlig-Pare, S. Atintono, A. Bodomo, K. Essizewa, & H. Hudu. (2017). A comparative syntax of internally-headed relative clauses in Gur. *Glossa* 2(1), 27.、Hiraiwa, K. (2017). The faculty of language integrates the two core systems of number. *Frontier in Psychology: Language Sciences* 8:351. などがある。

○ 問合せ先

公益財団法人ラボ国際交流センター 東京言語研究所

〒169-0072 東京都新宿区大久保 1-3-21 新宿TXビル 2 階

TEL:03-6233-0631 FAX:03-6233-0633

E-mail:info@tokyo-gengo.gr.jp ホームページ:<http://www.tokyo-gengo.gr.jp/>

「誰」や「誰か」等の不定語表現は自然言語の普遍的特徴とも言えます。1965年の S.-Y. Kuroda による MIT 博士論文以来、日本語の不定語に関しては数多くの研究がなされてきました。日本語のように「か」や「も」といった particle を基にした不定語システムでは、長らく当然その particle こそが真の認可子であり、異なる不定語表現を生み出していると考えられてきました。先行研究では非常に多くの場合「も」は付加を表す要素 (additive)、「か」に関しては選言を表す要素 (disjunctive) と分析されていますが (Kuroda 1965, Hagstrom 1998, Jayaseelan 2000 等)、長年に渡る研究にも関わらず、その妥当性の検証も含め、particle が不定語の認可において一体どのような文法機能を果たし、統語構造上どの位置を占めるか等、解決されたとは言えません。

本集中講義では、まず不定語の先行研究を概観した後、不定語表現を統語的分解することではめて不定語の統語メカニズムが解明されることを解説していきます。さらに日本語の不定語システムと沖縄語や Buli 語や Kabiye 語の不定語システムの比較対照も行い、不定語システムの普遍性を明らかにします。

Hiraiwa and Nakanishi (2020)で明らかにしたように、「誰が来ようが気にしない」のように「か」も「も」も現れないにも関わらず不定語が文法的になるデータが多々存在することは、日本語の不定語システムにおいて、不定語を認可しているのは顕在的な(音声化される)particle ではなく、不可視の要素である可能性が高いことを示しています。すなわち、今日に至るまで不定語と顕在的な particle との組み合わせとして説明されてきた不定語システムの問題は捨て去り、その認可を非顕在的要素に求めるパラダイム転換的な理解が必要であることを見ていきます。また、日本語の「か」と異なり、沖縄語には選言を表す専用の形態素が存在しません。この事実からも、不定語から存在量化詞を生み出す要素が選言要素であるとする先行研究が正しくないこと、さらに日本語の存在量化詞に現れる「か」の実体も再考せねばならないことは自明と言えるでしょう。

27日(土)

10:30 講義—1
12:00 講義—1 終了 休憩
13:00 講義—2
14:30 講義—3 終了 休憩
14:45 講義—3
16:15 講義—3 終了

28日(日)

10:30 講義—4
12:00 講義—4 終了 休憩 昼食
13:00 講義—5
14:30 講義—5 終了 休憩
14:45 講義—6
16:15 講義—6 終了